

共同研究 ● 民俗資料保存論の構築と素材に応じた保存処理法の開発 (2007-2010)

### 民俗資料の現状

1950年代半ばからおよそ20年間にわたって飛躍的な経済成長を遂げたわが国は、戦後からの確かな復興を国内外に示すとともに、国民自身も生活の安定を実感した時代でもあったといえる。一方でこの成長は、それぞれの地域に特有の環境で育まれた町並みや生活習慣の画一化を進め、良い意味でも悪い意味でも地域文化の独自性を失わせる側面もあったと考える。

そこで注目されたものが民俗資料である。なかでも地域文化を表象するものとして焦点があてられたものに民具があり、1979年に刊行された宮本常一氏による『民具学の提唱』をはじめ、1985年の岩井宏實氏らの編集による『民具研究ハンドブック』や『民具調査ハンドブック』など民具学のバイブル的な本が刊行されている。また、民具を中心とする民俗資料群の保存処理活動もこの時期から始まっている。1972年に重要有形民俗文化財「赤穂の製塩用具」の保存処理が(財)元興寺文化財研究所において実施されたことを契機に、例年のように国指定をはじめとする多くの民俗資料が保存処理の対象となってきた。このような動きは高度経済成長が進むなか、地域文化の崩壊、あるいは日本人の生活文化の基層をなすものが消滅していくことへの危機感が大きな原動力のひとつとなっていたことは想像に難くない。

それでは、現在の民俗資料を取り巻く環境はどうであろう。民俗資料そのものについての注目度が薄れ、さらには博物館施設などでも維持することすら難しくなって放置されてしまう実態があるのではないだろうか。この要因には、まず、民俗資料は従来、製作者や使用者、代替となる資料が多く残っていたことから、資料を後世に残す必要性についてはあまり議論されてこなかったことが挙げられる。また、長く続く不況のなか、文化財の保存活動に関する予算措置がなかなか行われれないということも挙げられよう。さらには、大量であるが故に、また生活に密着したものであるが故に文化財的な価値も低くみられがちになるということも考えられるのである。

### 共同研究の目的

前述したように、民俗資料を取り巻く環境は明るいものでは

ない。また、民俗資料を製作する技術者の高齢化や後継者不足の問題が深刻化しており、その技術の継承があやぶまれている現状もある。そこで、本共同研究では、民俗資料が我々にとってどのような意味があるのかを再考し、さらに大量かつ多様な素材で構成される民俗資料の保存のあり方について考えることを目的としている。そして、これらの目的を達成するため、これまでの民俗資料への眼差しを振り返るとともに、民俗資料に施されてきた保存処理のあり方を再検証することとした。

### 共同研究の構成

共同研究の目的を達成するため、研究会ではテーマを大きくふたつに大別した。ひとつは、民俗資料の保存の必要性や、保存のあり方を定義づけるための民俗資料保存論の構築であり、もうひとつはさまざまな素材で構成される民俗資料について、それぞれの素材に応じた民俗資料の保存処理法の研究開発をおこなうことである。

民俗資料保存論の構築では、民俗資料の保存について基本的な指針を示すことを目的とする。ここでは、民俗資料をとりまく環境を観察、分析し、民俗資料というモノの保存のあり方と民俗資料を製作する技術の保存のあり方についてとりまとめる。研究を実施するにあたっては、民俗文化財を指定する立場にある研究者、民俗学や民具学を専門とする研究者、そして、保存科学を専門とする研究者、さらには、実際の民俗資料の管理を実践している学芸員を中心に研究を展開するというものである。

一方、民俗資料の保存処理法の研究開発は、従来の民俗資料の保存処理法を再検討し、そこで明らかになった問題点を改善する技術の開発を行う。また、これまで見落とされてきた民俗資料の素材に応じた、新たな保存処理法の開発を視野に入れる。研究の主体には、保存科学を専門とする研究者と民俗資料の保存処理に関わる保存修復家を据える。なお、ここでの研究はさまざまな実験が必要となってくる。そこで、これらの技術開発にかかわる研究活動では、筆者が代表を務める科学研究費補助金若手研究A「耐震性を考慮した被災文化財の保存修復方法の研究」と共同研究員の一人である石井里佳氏が代表を務める科学研究費補助金基盤研究C「民



国立民族学博物館の収蔵庫の様子。さまざまな形状の民俗資料を管理するためには、整理し、効率よく収蔵していくセンスも求められる。

俗資料の塩分劣化の解明とその対処法の研究——博物館実践型保存処理法確立を目指して」の研究活動と密接に関連性を持たせて進めることとした。

#### これまでの研究から見てきたもの

これまでの研究会のなかで、民俗資料保存論構築については、民俗資料を保存するための活動のひとつである保存修復のありかたについて、従来の文化財の保存修復の基本理念である現状保存（現状維持）の考え方だけで対応できる

のかという課題を見出した。これは、民俗資料が内包している情報、つまり、その使用方法や製作技術などの保存について、単にモノだけを残すだけでいいのかという指摘からなされたものである。このことから、民俗資料を保存する場合は、いわゆるモノだけを残すのではなく、民俗学や民具学の研究成果のもとに、保存修復活動を展開し、さらにその技術継承がおこなわれる環境の構築を模索しなければいけないという結論を導き出したのである。

民俗資料の保存修復方法の開発では、保存上の問題となる素材ごとの研究に焦点を当てた研究会を実施した。そこからは、ケズリカケのような薄く削った木質文化財、塩分劣化を起こしている醤油醸造用具や製塩用具、硬化した皮革資料に着目し、それぞれの素材ごとの保存上の問題点および修復後の仕上がりのイメージについて討論した。さらに、ここで得られた知見をもとに樹脂含浸法、脱塩処理法、水分を利用した皮革資料保存処理法、不乾性油を利用した錆止め処理法の開発のための実験計画を作成し、(財)元興寺文化財研究所の共同研究会メンバーとともに実験を始めた。その事例のひとつとして、ここでは、硬化して変形した皮革資料の形状回復のための保存修復技術の開発を紹介する。

皮革資料の保存では、従来、硬化して変形するままに保存される例が多く、結果として、その用途や元の形状が不明となる問題が指摘されてきた。このような課題に対して研究会では、皮革産業で伝統的に用いられてきた「あじとり」という手法に着目した。あじとりとは、硬くなった皮革に湿り気を与えることで、形状を回復させるという方法である。そこで、この方法を保存修復技術に応用するため、硬化した皮革の水分量や形状を矯正するために有効な水分量の計測をすすめている。また、実際に皮革のなめしを手掛けている生産者に講師を依頼し、なめしの工程やあじとりの手法について聞き取り調査をおこない、2010年度中の技術開発を目指しているところである。

また、これまでの研究会の成果は、博物館における虫害管理や金属素材の錆止め処理で用いる不乾性油の効果について、日本民具学会が主催した公開シンポジウム「民具をま



不乾性油を用いた錆止め作業。本研究会では博物館職員が安全に行える保存処理方法の研究も行った。

もる」のなかで発表した。また、木材資料への保存処理法の成果については、文化財保存修復学会や日本文化財科学会で発表した。特に2010年度の日本文化財科学会大会では、本共同研究の成果として発表した「民俗資料の劣化とその対処法に関する研究(1)——木部への塩分浸透実験と金属防錆処理法の検証実験——」が第4回ポスター賞を受賞し、当研究会の研究手法やその成果の有効性を示すことができたと考えている。

#### これからの研究の展開

これまでの研究会から、民俗資料のもつ文化的な意義として、これからの日本文化を考えていく上で極めて重要な資料群であることがあらためて確認されるとともに、その重要性について、社会に十分伝えられていないことを認識した。また、このようなメッセージ性の不足を補うためには、地域や博物館のなかで保存も視野に入れた体験活用のあり方を模索し具体化していくことで、民俗資料保存論の骨子が形成されていくという結論に達した。その可能性について、近年、民俗資料館を中心に試みられている民具の体験学習に注目した。ここでは、実際に民具を使用してきた方を講師とし、その使用方法を受講者が学ぶという場が提供されている。また、体験学習で使用する民具を修理することもおこなわれ、この一連の活動が、民具の使用方法や道具としての維持管理方法を体験的に継承できる仕組みとなっている。このような取り組みは、モノの保存に新たな視点を加えた、民俗資料の総合的な保存活動となり得る可能性があると考えられる。ただし、そこで使用される民具は消耗品的となり、現状保存という理念とは矛盾する危険性もはらんでいる。今後は、このような矛盾が生じないための方法論の開発を視野に入れることが必要であろう。

素材に応じた保存処理方法の研究では、前述した皮革資料の保存処理法のほか、藁などの植物資料の開発も遅れていることが明らかになった。また、地震などの災害で被災した場合の対処法についても未解決な部分が多く、今後、取り組むべき課題として確認した。

以上の成果を踏まえ、今後は、これまでの学会発表、あるいは投稿論文をはじめとした成果を再編し、広く社会に公開していきたいと考えている。

#### ひだか しんご

文化資源研究センター准教授。専門は保存科学。主に民族(俗)資料の保存修復方法の技術開発をテーマに研究活動を行っている。著書に『女乗物：その発生経緯と装飾性』(東海大学出版会 2008年)、編著書に『博物館への挑戦：何がどこまでできたのか』(園田直子と共編 三好企画 2008年)など。